

# 社会で活躍する人材の育成を目指す館林高校の進路指導

群馬県立館林高等学校進路指導部

はじめに

9年前、本校では社会で活躍する人材の育成を目指して3つのプログラムを策定した。学力向上プログラム、自分探しプログラム、進路・専門探しプログラムの3つである。また6年前、「部活動と学業の両立」を目指してプロジェクトチームを結成し、「早朝は学習、放課後は部活動」という棲み分けを行うことにより、文武両道を達成できる環境作りを実現した。これらのプログラムは、各分掌や教科が連携して実践されているものである。現在、より生徒の実態及び時代の要請に応えるために、これらのプログラムを基にさらに改良を加えた上で行われている。改良したプログラムを表1に示す。

表1 改良したプログラム

学力向上プログラム	自分探しプログラム	進路・専門探しプログラム
授業の重視 習熟度別・少人数授業 英語力アッププロジェクト 課外授業・補習授業 家庭学習用課題の充実 定期的な学習実態の把握 学力分析会の実施	学習・進路ノートの活用 小論文指導 高校生の主張を聴く 50km強歩大会 部活動への積極的参加 基本的生活習慣の確立 在り方・生き方講演会	職業進路講演会 職業研究企業訪問 学部学科別進路講演会 大学訪問 オープンキャンパス参加 学年別進路講演会

特徴的な取組の事例

ここでは、前掲したプログラムの中から特徴的な取組をいくつか選んで説明する。

## 1 学習・進路ノートの活用

### (1) 目的

毎日の学習状況・生活状況を振り返ることを通して、自主的な学習習慣の確立を図るとともに、学習教科のバランス・部活動との両立状況を把握する。

### (2) 実践

図1に学習・進路ノートの一部を示す。学習・進路ノートを毎日生徒に記入させ、担任がコメントを記入し、学習実態の把握に努めている。毎週月曜日には、先週分の週計をまとめ、週の反省も記入させ、生徒に自己の家庭学習を振り返らせている。

学習・進路ノートは、基本的に学校で朝のSHR前に前日の生活状況を記入させ、担任はその日のうちに全員のノートをチェックする。また、月1回のペースで学習量調査を実施し、クラスごと、教科ごとに家庭学習量を集計し教科指導に役立てている。

### (3) 成果

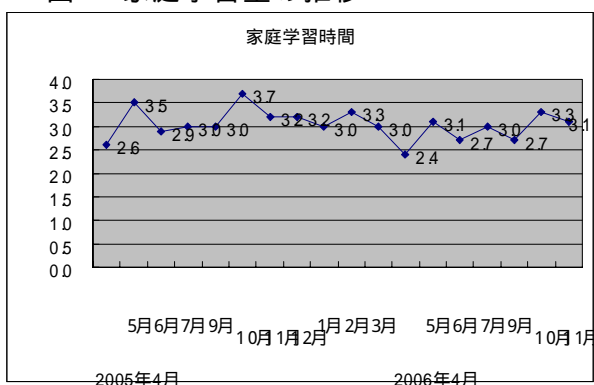
昨年度から今年度の11月にかけての家庭学習量の推移を図2のグラフで示した。本校における家庭学習時間の目標は、1日平均3時間である。おおむね目標は、達成さ

れていると考える。また、生徒の生活に変化が現れたとき、生活状況をチェックすることにより担任は容易にその変化を知ることができるため、早期の対応が可能である。

図1 学習・進路ノート



図2 家庭学習量の推移



#### (4) 課題

自主的な学習習慣の確立や学習実態の把握、一人一人の生徒理解のために、学習・進路ノートは有効であるが、40人分の学習・進路ノートを毎日チェックすることは担任にとって負担が大きいことが課題である。

## 2 職業進路講演会

#### (1) 目的

自らの職業観を育成し、進路決定に対する意識の向上と学習意欲を高める。

#### (2) 平成17年度の実践例

第1学年の進路指導として最初に行う大行事である。本校卒業生を講師（パネリスト）に迎え、パネルディスカッションの形式で実施する。その際、他のパネリストや全体の進行は、各クラスの代表者（正副委員長または進路委員など）を中心に編成する。また、1時間につき1つのテーマ（例：「社会人に必要とされるもの」「就職を見据えた進路選択」など）に絞り、それぞれの立場から意見をいただき、就業観、資格などについて理解を深める。

講演会に関係する業務は可能な限り生徒主体で行い、教員は講師の選定や講演依頼、ディスカッションのコーディネーターを務める程度にする。

資料1に平成17年度職業進路講演会実施要項を示す。なお、図3に示すワークシートを使って、事前・事後の指導を行った。

#### (3) 成果

事後アンケートの結果、「進路を考える上で参考になった」と答えた生徒は91%、「学習意欲が高まった」と答えた生徒は90%であった。パネルディスカッションは体育館の壇上で実施し、生徒は下からその様子を聴くという形式であったが、パネリストに生徒が加わったことで会場全体が一体感に包まれ、質問も数多くあり当初の目的を十分に達成できた。

資料1 平成17年度職業進路講演会実施要項

<p>日時 平成17年6月25日 5限～7限          会場 館林高等学校 第1体育館          対象 1年生全員          日程 13:05 開会          13:10 講師(パネリスト)紹介          13:15 パネルディスカッション          第1部 テーマ「高校生として生きる」          13:45 質疑応答～第1部終了          14:00 パネルディスカッション          第2部 テーマ「社会人として生きる」          14:30 質疑応答～第2部終了          14:35 謝辞          14:40 講師退場          7限は事後指導</p>	<p>講師の名前と職業(敬称略)          葭葉 裕子(弁護士)          秋定 宏和(弁護士)          河村 博(ホテル人事)          正田 茂(自動車デザイン)          杉田 光章(臨床検査技師)          太田 佳伸(IT企業顧客アドバイザー)          葭葉裕子様は本校OBの葭葉昌司氏の御息女で、当日御主人秋定宏和様とともに、代理で参加された。</p>
--	--

図3 事前指導・事後指導のワークシート

(4) 課題

本校OBである社会人講師をお招きするために実施日を土曜日に設定している。平成17年度は6月の第4土曜日に設定したが、部活動の公欠者が予想以上に多かった。今年度は、部活動の公欠者を減らし、また保護者に参加してもらうため5月のPTA総会の午前に設定した。1年生にとっては、まだ高校での定期テストも経験しておらず、事後アンケートの結果では十分な成果が得られたとはいえない。実施時期が大変重要であり、6、7月の実施が適当であると考えます。今後は、小・中学校のキャリア教育とのつながりを考慮し、また、できるだけ多くの職種のOBに参加してもらい、職種ごとにキャリアアドバイザーを迎えた講演会を模索したい。資料2にパネルディスカッションの様子を示す。

## 資料2 パネルディスカッションの様子



### 3 学部学科別進路講演会

#### (1) 目的

- ・生徒に大学の学部・学科及び学問に対する理解を深めさせる。
- ・学問の面白さに気付かせ、自ら学ぶ意欲を高める。
- ・大学進学する上での目的意識の明確化と的確な進路選択を促す。

#### (2) 平成18年度の実践例

9月に実施した1、2年生対象の志望校調査結果を学部学科別に集計し、希望の多い大学・学部・学科の先生に学部学科の説明と模擬講義を依頼した。1、2年生は、合計25講座の午前・午後の講義からそれぞれ一つずつ選び、学科説明及び模擬講義を受講した。各講座の司会者は教員の専門性を考慮して選定し、普段の授業との連携を考えた。資料3に平成18年度学部学科別進路講演会実施要項を示す。また、表2に講座一覧を示す。

#### 資料3 平成18年度学部学科別進路講演会実施要項

平成18年度学部学科別進路講演会実施要項	
実施日	平成18年11月14日(火) 前半3、4限 後半5、6限
対象	本校1、2年生全員(希望により各分野に分かれて参加する)
内容	学科説明と模擬講義 ・学科説明では、学科とはどのようなことを学ぶ学科なのか、似ている学科との主な違いはどんな点か、について説明していただく。 ・模擬講義では、講師の先生の専門分野について、高校生に分かる言葉で講義をしていただく。
日程	前半講義 10:50～12:10(学科説明20分 模擬講義60分) 12:10～12:20(質問またはレポートのまとめ) 後半講義 13:05～14:25(学科説明20分 模擬講義60分) 14:25～14:45(質問またはレポートのまとめ)
その他	・生徒は前半一つ、後半一つ希望する学問分野を選んで参加する。 ・事前学習で、興味のある学部学科について冊子やインターネットで調べる。 ・講義終了後、生徒は講義の内容及び感想をまとめたものを提出する。

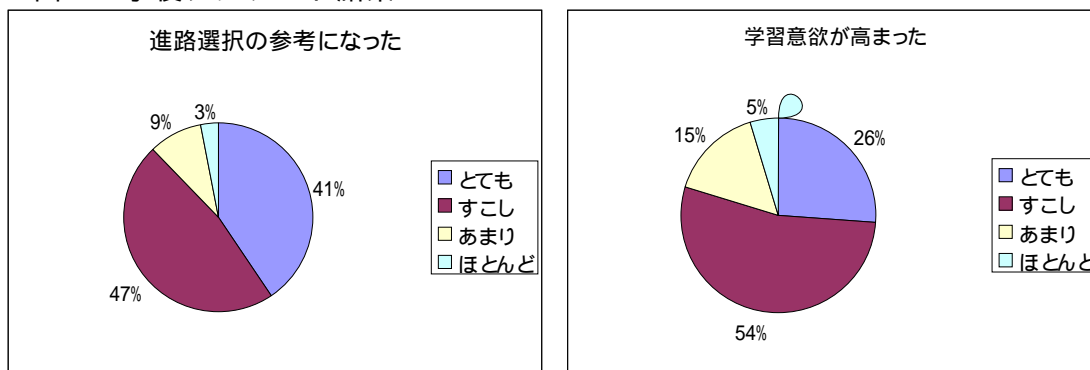
表2 講座一覧

NO	午前 午後	文理	大学	学部	学科	演題
1	午前	文	群馬大学	社情	情報行動学科	心理テストから入る心理学の世界
2	午前	文	群馬大学	教育	社会	社会科教育と郷土教育
3	午前	文	千葉大学	文	史学科	描かれた都市と事件ー中世の絵巻から歴史を考えるー
4	午前	文	高崎経済大学	地域政策	観光政策	地域政策学部で観光を学ぶ意義
5	午前	文	獨協大学	外国語	英語	英語を読み取る力を伸ばすには
6	午前	文	東洋大学	経営	経営	グローバル企業の技術戦略
7	午前	文理	日本大学	生物資源	食品経済学	社会科学とフードシステム
8	午前	理	埼玉大学	理	物理学科	超高エネルギー宇宙の謎と解明のための最先端実験
9	午前	理	群馬大学	教育	数学	算数・数学をどう教えるか
10	午前	理	群馬大学	工	機械システム	エンジンの歴史と科学
11	午前	理	群馬大学	工	電気電子	電波の不思議を科学する
12	午前	理	群馬大学	医	保健	脳の構造と機能
13	午前	理	東京学芸大学	教育	理科	肉食菌類の研究
14	午後	文	茨城大学	人文	人文コミュニケーション	常識を疑ってみる心理学ー学問をやるということー
15	午後	文	宇都宮大学	国際	国際社会科学	世界を学ぶ、世界から学ぶ
16	午後	文	東京学芸大学	教育	教育学	教育とは何かー教育学原論第1回ー
17	午後	文	埼玉大学	教養	教養	イギリスにおけるサッカーの社会史
18	午後	文	大東文化大学	法	法律	日常生活と損害賠償法
19	午後	文理	東京理科大学	経営	経営	トヨタ・日産・ホンダの財務分析を通して会社を見る
20	午後	理	宇都宮大学	農	生物生産科学	環境問題と微生物
21	午後	理	千葉大学	薬	薬	薬の投与経路と製剤ー薬を効果的に作用させる技術ー
22	午後	理	筑波大学	理工	工学システム	システムの自動制御と人間
23	午後	理	筑波大学	情報	情報科学	WWWとデータベース技術
24	午後	理	明治大学	理工	応用化学	身近な化学ーリチウムの世界ー
25	午後	理	前橋工科大学	工	建築	建築学ガイド

(3) 成果

事後アンケートの結果を図4に示す。「進路選択の参考になった」と答えた生徒が88%、「学習意欲が高まった」と答えた生徒が90%であった。生徒の感想にも「講義は難しかったけど、面白かった」「大学の学部や学科、大学卒業後の就職率などについて詳しく分かった」というものが多数あった。本物にふれることで学問に対する興味が深まったことが伺える。

図4 事後アンケート結果



(4) 課題

大学の先生は、講義でパワーポイントを用いることが多く、機材の準備の点で課題がある。また、年間計画で決められた日時に模擬講義を依頼するため、年度によっては生徒の希望の多い大学や学科の模擬講義を開講できないこともある。

## 4 職業研究企業訪問

### (1) 目的

- ・生徒に職業について広く詳細な知識を身に付けさせる。
- ・個々の生徒の将来的な展望を踏まえさせることにより、一層大学進学に対してのモチベーションを向上させる。

### (2) 平成16年度の実践例

興味のある様々な職業を事前に調べさせ、その中から訪問可能な企業等を選出し、班ごとにその企業について下調べした小冊子を作成した上で、各企業に訪問した。

事前準備と学習

訪問先企業の選定、仮依頼書送付

学年で候補を選ぶ。企業訪問依頼書、企業訪問依頼返信書。

訪問企業の確定

学年団のみで引率できることが前提。

訪問企業希望調査

地元企業は2カ所、東京等は1カ所。

事前指導1

学年全体に対する概要説明、その後、訪問先別に分かれ、代表1名、係分担(交通手段調査係、企業概要調査係、質問係、報告係)を決める。10名以上の場合、班を作り、班ごとに班長及び係を決める。事前指導2までに係ごとに調査を済ませ、用紙を担当教諭に提出する。担当教諭は調査レポートを全員分印刷し、事前指導2で配布。各個人は質問内容を一つ考え、質問係に提出する。

事前指導2

訪問先別に集合。係別にまとめたレポートを全員に配布し、係代表が説明する。質問をとりまとめ、優れた質問を採用する。必要に応じて、企業訪問計画書(しおり)を担当教諭が作成する。報告係を中心にパワーポイントのデータを作成する。

訪問企業へ依頼書、質問書、名簿を送付

保護者への連絡、同意書提出

当日参加

担当教諭の引率のもと、企業を訪問。表3に訪問企業一覧を示す。現地集合、現地解散。

事後学習

事後指導

訪問企業別に集合、企業概要、感想等を書き、報告係に提出。

報告書(パワーポイントのデータ)の作成

企業概要、企業からの説明、見学して分かったこと、印象に残ったこと、感想。

発表会

パワーポイントを使った班別のプレゼンテーション。資料4に生徒が作成したパワーポイントデータの例を示す。

表3 訪問企業一覧

訪問先	業種	所在地	人数
群馬銀行	金融	群馬県前橋市	20
サントリー利根川ビール工場	製造	群馬県邑楽郡千代田町	10
大日本インキ化学株式会社群馬工場	印刷	群馬県邑楽郡千代田町	
相澤法律事務所	法律	東京都中央区	10
東京都庁	公務員	東京都新宿区	30
本田技研工業	自動車	東京都港区	20
NTTドコモ	通信	東京都千代田区	20
リクルート	出版	東京都中央区	15
ベネッセ	教育	東京都多摩市	20
朝日新聞社	新聞	東京都中央区	20
警視庁	警察	東京都千代田区	20
東証アローズ(東京証券取引所)	証券	東京都中央区	20
SONY	電機・電子	東京都品川区	10
ジャストシステム東京支社	ソフトウェア	東京都港区	21

資料4 生徒が作成したパワーポイントデータの例(東証アローズ)





### (3) 成果

訪問企業は、中学校での職場体験を地元の企業や施設で実施していることを考慮し、東京の企業を中心に選定した。事後アンケートの結果も良好であり、目的は十分に達成されたと考える。

### (4) 課題

近年、多くの高校や大学で職場訪問を実施しており、企業によっては大学生のみ受け入れるところや人数制限が設けられるなど、訪問企業の選定に苦慮する場合がある。また、企業訪問が単なる行事に終わらないよう事前・事後の学習に力を入れたい。

## 5 学年別進路講演会

### (1) 目的

「大学進学に必要な知識」から「生き方・在り方」まで、将来の職業をにらんだ適切な進路選択に必要な能力の育成と学習意欲の向上に役立てるため、学年別に年3回実施している。

### (2) 平成18年度第1学年第2回進路講演会の実践例

11月16日、館林市三の丸芸術ホールを会場に、NPO法人「企業教育研究会」(事務局は千葉大学教育学部内)と連携して2部構成で実施した。第1部では、「好きなことと仕事をつなぐ生き方」をテーマに企業教育研究会による公開授業を、第2部では千葉ロッテマリーンズの事業部長荒木重雄先生を講師に迎え、「夢は志」の演題で講演をいただいた。

### (3) 成果

事後アンケートの結果及び生徒の感想(主なもの)を資料5に示す。



## 資料5 事後アンケートの結果

<p>第1部 「好きなことと仕事をつなぐ生き方」の話聞いて自己の進路実現を考える上で参考になりましたか。</p> <p>とても参考になった。 . . . . . 38.9%</p> <p>少し参考になった。 . . . . . 49.6%</p> <p>あまり参考にならなかった。 . . . . . 10.2%</p> <p>まったく参考にならなかった。 . . . . . 1.3%</p>
<p>第2部 「夢は志」の話聞いて、これからの人生に役立つ知識を得られましたか。</p> <p>とても知識を得られた。 . . . . . 67.3%</p> <p>少し知識を得られた。 . . . . . 31.0%</p> <p>あまり知識を得られなかった。 . . . . . 0.9%</p> <p>まったく知識を得られなかった。 . . . . . 0.9%</p>
<p>本日の進路講演会の話聞いて進路実現するための学習意欲は高まりましたか。</p> <p>とても高まった。 . . . . . 38.5%</p> <p>少し高まった。 . . . . . 53.5%</p> <p>あまり高まらなかった。 . . . . . 7.1%</p> <p>まったく高まらなかった。 . . . . . 0.4%</p>
<p>生徒の感想(主なもの)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・自分が今までなりたと思っていた職業の裏にも色々な職業があることを知り、もう一度職業について考えてみようかと思いました。</li><li>・荒木先生の「やらされているのではなく自分からやる」ということについて、自分自身を振り返るとやらされている感じがあった。これからは自分から何事にも積極的に取り組んでいきたいと思います。</li><li>・これからの進路について希望がもてた。目標を決め進んでいけば、いつしか夢が叶うと思った。</li></ul>

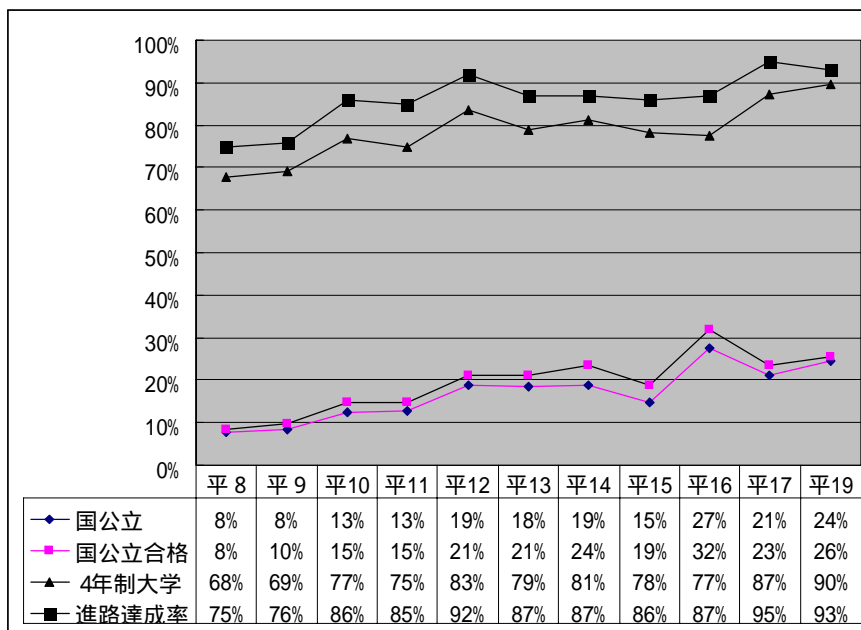
### (4) 課題

学年別進路講演会は、生徒及び保護者を対象に実施している。本校では、PTA総会に95%の保護者が出席するが、進路講演会への出席となると、多少出席率が下がる。7月実施の第1回学年別進路講演会は、保護者が出席しやすいよう土曜日に行っており約80%の保護者が参加する。それに比べて11月、3月実施の講演会は平日に実施するため保護者の参加率は平均すると70%弱である。魅力的な講師を選定したり、学年別にタイムリーな内容の講演会を企画したり試みるが、保護者の参加率に関しては十分とはいえない。参加者に対するアンケート調査の結果は大変満足のものとなっているが、保護者の参加率の向上が課題である。

### 成果 - 過去10年間の進路状況 -

過去10年間の4年制大学進学率及び国公立進学率の推移を図5のグラフで示した。大学進学率及び国公立大学進学率は右肩上がりの折れ線を描いている。また、合格率と進学率が極めて近い数値になっているのは、様々な進路学習の成果の表れと思われる。なぜなら、このことはこれらの取組の結果、生徒が将来の職業をにらんで「入りたい大学」「やりたいことのできる大学」を自ら選択していることを示していると考えられるからである。

図5 過去10年間の進路状況



#### 今後の課題

進学校の教員が陥りがちな傾向として、大学進学を目標とするあまり授業も大学進学に特化しがちである。体験的な学習や大学の先生による模擬講義、社会人による自らの体験に基づいた講演等は、生徒にとっては魅力的であり、学習への意欲を一時的に高めるものの授業とのつながりは十分とはいえない。そこで、授業においては目的と手段を取り違えないように常に本物の学問を意識しつつ、確かな学力を育む気概を持ち続けることが大切と考える。

そのために、生徒一人一人の興味、関心に基づく自発的な学習を促し学習習慣を身に付けさせること、家庭での学習時間を確保させることは大切なことである。またその一方で、基礎的な学力の習得のために、時には強制力を持って学習させる必要もある。「その時々生徒の状態に合わせた家庭学習用課題を与える」「与えた課題は必ずやり遂げさせる」などである。そのときも、常に「量と質」「教科間」のバランスを考えることが必要である。教育の根本は人格のふれあいにあることを念頭に置き、常に本来の目標を再確認しながら日々の実践をなすべきであると考えます。

また、ここ数年、キャリア教育の必要性が叫ばれ、4領域8能力の養成が急務ということで様々な実践がなされている。キャリア教育は学校での教育活動全体を通じて行われるものであろうし、キャリア形成は学校教育のみならず社会に出てからも生涯続けるものであろう。高校においては、中学校や大学との連携や情報交換、社会人講師による授業や講演など地域教育力を活用することが、さらに必要と考える。本校では、以前から「社会に出てから活躍できる人材の育成」を目指している。部活動を奨励し「文武両道」を達成しやすい環境作りを考えており、実際に75%の生徒が部活動との両立を果たしている。これからも「自分は何が好きか、得意か」「将来社会に出て、何ができるか」を常に考えさせ、そのための能力をいかに身に付けさせるかを模索し、生徒の実態や社会の変化に合わせた教育実践を続けていきたい。